

学習支援ボランティアの派遣校に対する評価

山本 真由美^{*1} 津島 知彦^{*2}

Evaluation from the learning support volunteers about the schools they were sent

Mayumi YAMAMOTO^{*1} and Tomohiko TUSHIMA^{*2}

Abstract

The special needs education started from April 2007 earnest. Accordingly learning support volunteer students have been utilized at schools.

The purpose of this study was to consider environmental conditions, supporting activities and needs arising from students' support activities. Special needs education and activities of learning support volunteers were used then as a reference.

As a method, questionnaires were used. The results of this study were as follows: environmental conditions were settled for the most; future subjects emerged such as the contacts and guidance between learning support volunteers and teachers, and support activities guidance in their universities. We discussed these themes.

Key words : Special needs education, Learning support volunteers, Support activity guidance

はじめに

日本における特別支援教育は、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する実態調査」結果報告(2003年3月)以降、急速に変化してきている。

2005年12月に「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)」が取りまとめられ、それに基づき、2006年3月に「学校教育法施行規則」の一部改正が、2006年6月に「学校教育法」等の一部改正が行われ、2007年4月から全国の幼稚園、小学校、中学校、高等学

校、特別支援学校等において本格的に特別支援教育が実施されることとなった。山崎(2005)は、①通常学級における整備の立ち遅れ、②個別の教育計画やこれと整合する個別の指導計画立案・実施・評価の困難さ、③特別支援教育が想定する全ての特別な教育ニーズに対応できる教師とこれを養成する高等教育・研究研修機関の不在、④児童精神科医療制度の未確立、⑤財政的問題の解決が優先されかねないという5つの政策上の課題を挙げていた。

*1 徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

*2 多度津町教育委員会 A Board of Education, Tadostu Town

このような課題を包括的に解決するために、特別支援教育において大学生をはじめとするボランティアのマンパワーに期待が寄せられている。2002年度から神戸市において「LD等への支援事業」が実施されている(神戸市小学校長会, 2004)。教職課程や臨床心理士養成課程の大学生や大学院生、内地留学生を市内の小中学校に派遣し、専門家による巡回相談も行なわれ、人材確保に乗り出した。人的資源としての学生に対する期待は大きく、神戸市をはじめ、多くの地域で実施されている(戸ヶ崎・酒井・溝邊, 2008)。

徳島県教育委員会では通常の学級に在籍する発達障害などで特別な支援を必要とする児童生徒一人ひとりの特性に応じた指導支援の充実を図ることを目的に、県内4大学と連携し、大学生・大学院生を小学校・中学校に「学生支援員」として派遣し、学級担任等の補助として2006年10月から生活や学習の支援を行っている。

徳島市教育委員会(以下、市教委)においても、2005年から独自の取り組みとして「徳島市特別支援連携協議会」を設置し、関係機関との連携による支援体制の整備を目指し、「学習支援ボランティア」という名目で徳島市内の小学校・中学校に大学生・大学院生を派遣している。「学習支援ボランティア」の支援対象は、通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒、及びその特性のある児童生徒を中心に、支援を必要とする全ての児童生徒であり、特別支援教育コーディネータや学級担任等の指導のもと、学習や生活の指導支援を補助するというのが支援内容である。派遣対象校は通常の学級に発達障害などの特別な支援を必要とする児童生徒が在籍し、かつ徳島市の特別支援教育に関す

る調査研究及び学生の大学における研究に協力できる学校とされている。活動時間は週に1回、午前または午後4時間程度で、具体的な時間は各学校とボランティア学生個人で打ち合わせをして決めている。徳島市ではこの制度開始から6年目を迎えている(徳島市教育研究所, 2010)。若干の交通費とボランティア保険への加入の保障はあるもののあくまでもボランティアであるこの活動は、学生にとっても意義のある活動となるべきものであり、社会的自立、職業的自立に役立つ活動になる必要がある。

学生をボランティアとして特別支援教育で活用していく中で、新たな課題が生まれつつある。

学生を学生支援員として小中学校に派遣を行っている宮崎大学と宮崎県が行った調査(戸ヶ崎・酒井・溝邊, 2008)によると、現場の教師、ボランティアに参加した学生とともに、活動に対して肯定的な印象を持っていた。しかし、教師からは「派遣されるボランティアの具体的な活用方法が分からなかった」や「派遣される学生個々の特別支援教育や教育的な知識の習得度合い等、ボランティア要員の個々の情報が欲しい」などの不安が見られた。また、学生からは現場において、「何をどこまでして良いのか分からない」や「教師との反省会や打ち合わせが無いことが不安」等、ボランティアとしての役割や派遣先学校との連携に関する不安のあったことが浮き彫りになった。このように、活動自体に不安や戸惑いは見られないものの、実際活用していく中での不安があることが明らかになった。

同様の取り組みを行っている徳島市においても、活動に参加する学生や教師が何らかの課題や不安を抱えている可能性がある。

本研究では、学習支援ボランティアをしている学生を対象とし、実際に派遣された学校や学級においてどのような環境でどのような支援を行っているのか、また、活動していく中で学生が必要としているものは何かを質問紙調査を用いて検討し、今後の特別支援教育及び学習支援ボランティア活動の参考資料にすることを目的とした。

方 法

(1) 調査協力者

徳島市学習支援ボランティアに参加している学生（小学校 51 名，中学校 22 名）計 73 名を対象とした。回収率は全体で 91.8 %（小学校：96.1 %，中学校：81.8 %）であった。派遣校種別、性別の内訳は Table1 の通りである。

(2) 調査実施期間

2008年12月中旬から2009年1月上旬であった。

(3) 調査方法

質問紙調査法を用いた。調査内容は以下の通りである。

1)フェイスシート：①所属大学，②学年，③派遣校種，④性別の 4 項目であった。

2)派遣校決定までに関する質問：派遣校が決まるまでの事柄に関する 2 項目を設定した。①市教委からの説明，②派遣校との打ち合わせである。

3)派遣校に関する質問：18 項目を設けた。①学校の所在地を知った方法，②事前打ち合わせまでに欲しい情報，③活動予定変更の有無，④学校行事への参加依

頼の有無，⑤活動報告書(ボランティア学生の出勤簿にあたるもの)の保管場所，⑥着替え場所の有無，⑦利用できる机の有無，⑧荷物置き場の有無，⑨給食を食べているか，⑩支援する学年・学級が決まっているか，⑪支援方法の指導の有無，⑫教師との打ち合わせ時間の有無，⑬帰校時刻は一定か，⑭連絡記録表(ボランティア学生の活動内容，支援内容や疑問点などを書き，派遣校の指導教師との連絡に用いるもの)は誰が読んでいるのか，⑮連絡記録表に返信があるか，⑯連絡記録表に記載した内容は支援に反映されているか，⑰市教委の説明との相違点の有無，⑱市教委の説明時の配布物に関する相違の有無を設定した。

4)ボランティア参加者自身に関する項目 学習支援ボランティア自身に関する項目を 8 項目設定した。①ボランティアで得たものの有無，②活動時間の適切さ，③生徒児童の発達状態に対する理解の有無，④支援方法への理解の有無，⑤大学からの指導の必要性，⑥派遣校への移動手段，⑦派遣校までの移動時間，⑧その適切性であった。

なお、各設問には必要に応じて自由記述欄を設けた。

(4) 統計分析方法

各質問項目ごとにフェイスシートの各項目（所属大学，所属学年，派遣校種，性別）別にクロス集計を実施し，下位検定として χ^2 検定を行った。また，自由記述についてはテキストマイニング分析を実施した。

Table 1. 協力者の男女別派遣校種別人数内訳

派遣校種 \ 性別	男性	女性	合計
小学校	17	32	49
中学校	8	10	18

結 果

各質問項目ごとにフェイスシートの各項目（所属大学，所属学年，派遣校，性別）別にクロス集計を実施した結果，派

遣校による差が最も多かった。派遣校別回答人数(%)と有意確率を Table2 に示した。

Table 2. 派遣校別質問項目における人数(%)と有意確率

質問番号	質問項目内容	選択肢	小学校 (%)	中学校 (%)	有意差
Q1	市教委からの説明	分かった	46 (93.9)	17 (94.4)	n.s.
		分からなかった	1 (2.0)	0 (0.0)	
		無記入	2 (4.1)	1 (5.6)	
Q2	派遣校との打合せ	1回目に決まっていた	47 (95.9)	17 (94.4)	n.s.
		1回目の連絡後，うち合わせの連絡なし	1 (2.0)	0 (0.0)	
		事前打ち合わせなし	0 (0.0)	0 (0.0)	
		無記入	1 (2.0)	1 (1.5)	
Q3	学校所在地の情報収集方法	学校から地図を貰った	1 (2.0)	3 (16.7)	n.s.
		自分で調べた	36 (73.5)	10 (55.6)	
		その他	10 (20.4)	5 (27.8)	
		無記入	2 (4.1)	0 (0.0)	
Q4	打合せ前までに欲しい情報（複数回答可）	学校の住所・電話番号	19 (27.5)	11 (39.3)	n.s.
		学校の地図	34 (49.3)	11 (39.3)	
		学校要覧	12 (17.4)	6 (21.4)	
		その他	3 (4.3)	0 (0.0)	
		無記入	1 (1.4)	0 (0.0)	
Q5	予定変更について	あった	3 (6.1)	1 (5.6)	n.s.
		なかった	45 (91.8)	17 (94.4)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
SQ 5-1	「あった」と回答した人の変更時期について	1週間以上前	1 (33.3)	1 (100)	/
		1週間以内	0 (0.0)	0 (0.0)	
		前日	0 (0.0)	0 (0.0)	
		その他	2 (66.7)	0 (0.0)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q6	学校行事への参加要望	あった	25 (51.0)	3 (16.7)	$\chi^2=5.351,$ df=1, p=0.021
		なかった	23 (46.9)	15 (83.3)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
SQ 6-1	「あった」と回答した人の要望時期について	1週間以上前	23 (92.0)	2 (66.7)	/
		1週間以内	2 (8.0)	1 (33.3)	
		前日	0 (0.0)	0 (0.0)	
		その他	0 (0.0)	0 (0.0)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	

学習支援ボランティアの派遣校に対する評価

質問番号	質問項目内容	選択肢	小学校 (%)	中学校 (%)	有意差
Q7	活動報告書の保管場所	決まっている	47 (95.9)	18 (100)	n.s.
		決まっていない	1 (2.0)	0 (0.0)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q8	着替えの場所	必要	18 (36.7)	1 (5.6)	$\chi^2=4.858$, df=1, p=0.028
		不要	31 (63.3)	17 (94.4)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q9	着替えの場所の有無	ある	39 (79.6)	4 (22.2)	$\chi^2=16.19$, df=1, p=0.001
		ない	9 (18.4)	13 (72.2)	
		無記入	1 (2.0)	1 (5.6)	
Q10	利用できる机	ある	47 (95.9)	17 (94.4)	n.s.
		ない	2 (4.1)	1 (5.6)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
SQ 10-1	「ある」と回答した人の使用状態	単独使用	9 (19.1)	7 (41.2)	/
		複数使用	38 (80.9)	10 (58.8)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q11	荷物の置き場	ある	47 (95.9)	17 (94.4)	n.s.
		ない	2 (4.1)	1 (5.6)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q12	給食について	食べている	44 (89.8)	16 (88.9)	n.s.
		食べていない	5 (10.2)	2 (11.1)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
SQ 12-1		教室で児童生徒と	44 (100)	13 (81.3)	n.s.
		職員室で	0 (0.0)	0 (0.0)	
		その他	0 (0.0)	3 (18.7)	
Q13	支援する学年・クラス	決まっている	47 (95.9)	16 (88.9)	n.s.
		決まっていない	2 (4.1)	2 (11.1)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q14	具体的支援方法	指導がある	39 (79.6)	15 (83.3)	n.s.
		指導がない	9 (18.4)	3 (16.7)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q15	教師と打ち合わせする時間	ある	23 (46.9)	16 (88.9)	$\chi^2=7.475$, df=1, p=0.006
		ない	25 (51.0)	2 (11.1)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	

質問番号	質問項目内容	選択肢	小学校 (%)	中学校 (%)	有意差
Q16	帰校時刻	決まっている	47 (95.9)	18 (100)	n.s.
		決まっていない	1 (2.0)	0 (0.0)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
SQ 16-1	「決まっている人」の帰る時刻	だいたい定時に帰ることができる	46 (97.9)	18 (100)	/
		定時に帰ることができない	1 (2.1)	0 (0.0)	
		無記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
Q17	連絡記録表の確認者	誰が読んでいるか知っている	39 (79.6)	15 (83.3)	n.s.
		誰が読んでいるか知らない	9 (18.4)	3 (16.7)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q18	連絡記録表への返信	ある	32 (65.3)	13 (72.2)	n.s.
		ない	8 (16.3)	2 (11.1)	
		時々ある	8 (16.3)	3 (16.7)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q19	支援に活かされているか	活かされている	37 (75.5)	12 (66.7)	n.s.
		活かされていない	11 (22.4)	6 (33.3)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q20	市教委と学校での説明	同じだった	45 (91.8)	17 (94.4)	n.s.
		違っていた	2 (4.1)	0 (0.0)	
		無記入	2 (4.1)	1 (5.6)	
Q21	市教委から配布される備品	学校からすべて渡された	46 (93.8)	18 (100)	n.s.
		学校から配布されていないものがあつた	1 (2.0)	0 (0.0)	
		無記入	2 (4.1)	0 (0.0)	
Q22	活動から得たもの	あつた	48 (98.0)	17 (94.4)	n.s.
		なかつた	0 (0.0)	1 (5.6)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q23	ボランティアの活動時間	適切	48 (98.0)	15 (83.3)	n.s.
		不適切	0 (0.0)	3 (16.7)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q24	児童生徒の発達状態の理解	できた	45 (91.8)	17 (94.4)	n.s.
		できなかった	3 (6.1)	1 (5.6)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q25	児童生徒支援方法の理解	できた	35 (71.4)	16 (88.9)	n.s.
		できなかった	13 (26.5)	2 (11.1)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	

質問番号	質問項目内容	選択肢	小学校 (%)	中学校 (%)	有意差
Q26	大学で支援方法の指導	必要	26 (53.1)	12 (66.7)	n.s.
		不要	22 (44.9)	6 (33.3)	
		無記入	1 (2.0)	0 (0.0)	
Q27	派遣校までの交通手段(複数回答可)	徒歩	1 (1.9)	0 (0.0)	n.s.
		自転車	13 (25.0)	4 (21.0)	
		原動機付自転車	5 (9.6)	2 (10.5)	
		自動車	27 (51.9)	11 (57.9)	
		バス	3 (5.8)	1 (5.3)	
		汽車	1 (1.9)	0 (0.0)	
		その他	0 (0.0)	0 (0.0)	
		無記入	2 (3.8)	1 (5.3)	
Q28	移動時間	30分間以内	21 (42.9)	4 (22.2)	n.s.
		1時間以内(1時間を含む)	24 (49.0)	12 (66.6)	
		1時間以上	2 (4.1)	1 (5.6)	
		無記入	2 (4.1)	1 (5.6)	
Q29	移動時間の適切性	適切	33 (67.3)	10 (55.6)	n.s.
		不適切	13 (26.5)	7 (38.9)	
		無記入	3 (6.1)	1 (5.6)	

注)各セルの%は、小数点第2位で四捨五入計算を行ったため、合計が100%にならないこともある。

派遣校種によって差が見られた質問は4項目であった。

Q6「学校行事に来て欲しいと言われることはありますか」という項目では、小学校の方が中学校よりも要望が高かった。

Q8「着替えの場所は必要ですか」とQ9「着替えの場所はありますか」という項目では、小学校の方が中学校よりも要望が高かった。

Q15「先生と打ち合わせをする時間はありますか」という項目では、中学校では「ある」という回答が多かったが、小学校では「ない」という回答が多かった。

4項目以外は派遣校種による差はなかった。まず、市教委が実施する説明会の説明は分かったという比率が高かった($\chi^2=60.063$, $df=1, p<0.000$)。派遣校との

打ち合わせは直接ボランティア学生に派遣校からある。1回目の連絡時に打ち合わせ日時が決まったという比率が高かった($\chi^2=61.062$, $df=1, p<0.000$)。学校の場所は自分で調べた比率が高かった($\chi^2=43.785$, $df=2, p<0.000$)。打ち合わせまでに欲しい情報として学校の地図の比率が高かった($\chi^2=39.750$, $df=3$, $p<0.000$)。ボランティア活動中の予定変更はなかった比率が高かった($\chi^2=50.879$, $df=1, p<0.000$)。活動報告書の保管場所は決まっているという比率が高かった($\chi^2=62.061$, $df=1, p<0.000$)。ボランティア活動時に利用できる机と荷物置き場はあるという比率が高かった($\chi^2=55.537$, $df=1, p<0.000$)。給食は食べているという比率が高かった

($\chi^2=41.925$, $df=1, p<0.000$)。支援する学年や学級が決まっているという比率が高かった($\chi^2=51.955$, $df=1, p<0.000$)。具体的支援についての指導があるという比率が高かった($\chi^2=26.727$, $df=1, p<0.000$)。帰校時刻は決まっている比率が高かった($\chi^2=62.061$, $df=1, p<0.000$)。連絡記録表は派遣校先のどのような職種の人が読んでいるのかを知っており($\chi^2=26.727$, $df=1, p<0.000$)、返信があり($\chi^2=36.091$, $df=1, p<0.000$)、そこに書いた内容が支援に活かされている比率が高かった($\chi^2=15.151$, $df=1, p<0.000$)。

市教委での説明と派遣校先での説明は同じであり($\chi^2=61.062$, $df=1, p<0.000$)、市教委から予め派遣校から配布されると言われていた備品は全て配布された比率が高かった($\chi^2=61.062$, $df=1, p<0.000$)。

ボランティア活動で得たものがあつたという比率が高かった($\chi^2=61.062$, $df=1, p<0.000$)。ボランティア活動の時間は適切であつたという比率が高かった($\chi^2=54.545$, $df=1, p<0.000$)。児童生徒の発達状況は理解できたという比率が高かった($\chi^2=50.970$, $df=1, p<0.000$)。児童生徒への支援方法は理解できたという比率が高かった($\chi^2=19.636$, $df=1, p<0.000$)。大学での支援方法の指導は必要であるか不要であるかには有意差はなかつた($\chi^2=1.515$, $df=1, n.s.$)。

派遣校への移動手段は自動車利用比率が高かった($\chi^2=90.824$, $df=5, p<0.000$)。移動時間は1時間以内が多かった($\chi^2=26.469$, $df=2, p<0.000$)。移動時間は適切と考えている比率が高かった($\chi^2=19.636$, $df=1, p<0.000$)

次に自由記述部分について回答数が4以上の質問について WordMiner(日本電子計算株式会社, 2000-2003)を用いてテキストマイニング分析を実施した。こ

のソフトはテキスト型データの探索的データ解析を行うものである。自由記述回答を求めた質問項目、固有値、寄与率、累積寄与率は Table 3 に示す通りである。固有値は構成要素(自由記述内容を分かち書き処理を行い、分けた言葉)と質的変数(回答者の属性を示し、ここでは派遣職種)の関係の程度を見るものである。寄与率と累積寄与率から各成分の情報量とその成分までの累積された情報量の目安が確認できる。派遣職種をカテゴリーとして分析した。Table 4 から 12 にある「距離」は数値が小さいほど重心に近いことを意味する。「成分スコア」は対応分析により構成要素あるいは質的変数のカテゴリーに付与される数量化得点である。

「絶対寄与度」は1つの成分内に占める構成要素または質的変数のカテゴリーの重要度を示す指標であり、数値が大きいほどその成分内での影響は高くなる。本研究では構成要素と質的変数の対応分析を実施し、質的変数のカテゴリー別に構成要素の優位性を検定した。その数値は高い順位にカテゴリーである派遣校別に文中に示した。

Q1「わかりにくかつた」と回答した人は小学校で1名であつたので、テキストマイニング分析は実施しなかつた。その内容は「決まって連絡があつたのは直接学校だつたから」であつた。

Q3「派遣校の場所を知つた方法」で「その他」と回答した中、記述回答(小学校 10, 中学校 5)を分析した結果、Table 4 の通りとなつた。「下見(0.00)」、「知人(0.00)」が小学校と中学校のいずれでも検定値が高かつた。回答例として「自主的に下見に行つて調べた」、「知人に場所を教へてもらつた」などがあつた。

Table 3. 自由記述の質問項目とその内容およびその固有値・寄与率・累積寄与率

質問番号	質問項目とその内容	固有値	寄与率	累積寄与率	
Q 1	市教委の説明がわかりにくかった場合、その内容	/			
Q 3	学校の場所を知った方法のうち、その他の内容	0.0278	100.00	100.00	
Q 4	事前打合せ時に欲しい情報のうち、その他の内容	/			
Q 7	活動報告書が置かれている場所	0.0270	100.00	100.00	
Q 9	更衣場所がある場合、その場所	0.0505	100.00	100.00	
Q10	利用できる机がある場合、その場所	0.0383	100.00	100.00	
Q11	荷物を置く場所がある場合、その場所	0.0000	100.00	100.00	
Q13	支援する学級が決定の有無とそれについての考え	0.0491	48.17	48.17	
		0.0378	37.05	37.05	
		0.0151	14.78	100.00	
Q14	支援を依頼された児童生徒についての情報や具体的支援方法の指導がない場合、具体的にどのような支援を行ったのか	0.0556	100.00	100.00	
Q15	派遣校の教師との打合せ時間がある場合、その時間と内容	時間	0.0194	100.00	100.00
		時間帯	0.0159	100.00	100.00
		打合せ者	0.0509	100.00	100.00
		内容	0.0434	100.00	100.00
Q16	帰る時刻が決まっていない場合、困る内容	/			
Q17	連絡記録表を読んでいる人を知っている場合、その人の職種	0.0768	100	100	
Q20	市教委の説明会の内容と派遣校での説明で違っている部分がある場合、その内容	/			
Q21	市教委の説明会で派遣校で配布されるといわれたものが配布されなかった場合、その配布物	/			
Q22	学習支援ボランティア活動から得たものがある場合、その内容	0.0030	100.00	100.00	
Q23	学習支援ボランティア活動時間が不適切な場合、その内容	/			
Q24	所属大学での指導が必要な場合、望む内容	0.0138	100.00	100.00	

Table 4. 派遣校を知るその他の方法

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.429	0.04	0.1925	57.1429
中学校	0.571	0.02	-0.1443	42.8571
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
下見	0.286	0.02	0.1443	21.4286
知人	0.286	0.02	0.1443	21.4286
電話	0.429	0.04	-0.1925	57.1428

Q4「事前打合せ前に欲しい情報」のうち「その他」に記述回答したのは3名だったので、テキストマイニング分析は実施しなかった。その内容は、「服装や特に持っていくものはないかどうか」、「派遣学級の子どもの名前（座席表）」、「どのような支援が必要とされているのか」であった。

Q7「活動報告書が置かれている場所」

について小学校で42、中学校で14の記述回答があった。それらを分析した結果、Table 5の通りとなった。小学校では「職員室(0.35)」が高く、中学校では「教頭先生の机(0.35)」が高かった。つまり、活動報告書は小学校では職員室に置かれており、中学校では教頭先生の机の上に置かれていることが多いことがわかった。

Table 5. 活動報告書が置かれている場所

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.897	0.00	-0.0555	10.2564
中学校	0.103	0.24	0.4860	89.7436
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
職員室	0.897	0.00	-0.0555	10.2564
教頭先生の机	0.103	0.24	0.4860	89.7436

Q9「着替え場所」について小学校で37、中学校で3の記述回答があった。それを分析した結果、Table 6の通りとなった。小学校で「ロッカールーム(0.00)」、「休憩室(0.00)」、「空き教室(0.00)」, 中学校で「更衣室(0.79)」、「ロッカールーム(0.00)」が高かった。小学校ではロッカールーム、休憩室、空き教室が、中学校では更衣室、ロッカールームが着替え場所になっている可能性が高い。

Q10「利用できる机のある場所」について小学校で44、中学校で15の記述回

答があった。それを分析した結果、Table 7の通りとなった。小学校では「会議室(0.00)」、「控え室(0.00)」、「更衣室(0.00)」, 中学校では「職員室(0.72)」、「会議室(0.00)」、「控え室(0.00)」が高かった。つまり、小学校では、会議室、控え室、更衣室に、中学校では職員室、会議室、控え室に利用できる机がある可能性が高い。

Q11「荷物を置く場所」について小学校では32、中学校では15の記述回答があった。それらを分析した結果、Table 8

Table 6. 着替え場所

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.927	0.00	-0.0632	7.3171
中学校	0.073	0.64	0.8000	92.6829
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
更衣室	0.610	0.03	0.1798	39.0244
ロッカールーム	0.195	0.08	-0.2810	30.4878
休憩室	0.049	0.08	-0.2810	7.6220
空き教室	0.073	0.08	-0.2810	11.4329
特別支援室	0.073	0.08	-0.2810	11.4329

Table 7. 机の場所

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.761	0.01	-0.1098	23.9130
中学校	0.239	0.12	0.3492	76.0870
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
職員室	0.891	0.01	0.0684	10.8698
会議室	0.022	0.31	-0.5606	17.8261
控え室	0.022	0.31	-0.5606	17.8261
更衣室	0.043	0.31	-0.5606	35.6522
支援室	0.022	0.31	-0.5606	17.8261

Table 8. 荷物を置く場所

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	1.000	0.00	0.0000	0.0000
中学校	0.000	1.00	13.7840	0.0000
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
空き教室	0.105	0.00	0.0000	0.0000
更衣室	0.737	0.00	0.0000	0.0000
特別支援室	0.158	0.00	0.0000	0.0000
更衣室	0.043	0.31	-0.5606	35.6522
支援室	0.022	0.31	-0.5606	17.8261

Table 9. 支援する学級が決定の有無とそれについての考え

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア 1	成分スコア 2	成分スコア 3	絶対寄与度 1	絶対寄与度 2	絶対寄与度 3
小学校はい	0.772	0.01	-0.0053	0.1044	-0.0101	0.0442	22.2688	0.5217
小学校いいえ	0.024	1.65	-1.1831	-0.3128	0.3931	67.2991	6.1171	24.2218
中学校はい	0.188	0.17	0.2235	-0.3384	0.0606	19.2161	57.2812	4.6050
中学校いいえ	0.016	1.44	-0.6475	-0.5865	-0.8223	13.4406	14.3329	70.6517
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア 1	成分スコア 2	成分スコア 3	絶対寄与度 1	絶対寄与度 2	絶対寄与度 3
子ども	0.370	0.01	0.0210	-0.0688	-0.0306	0.3323	0.7748	0.1530
決まって(た)	0.150	0.05	0.1391	0.1775	0.0087	5.8889	0.6187	0.0015
関わり	0.110	0.06	0.1235	0.2117	0.0000	3.4245	0.7460	0.0000
学級	0.142	0.15	-0.3081	-0.1592	-0.1713	27.3774	0.1694	0.1962
名前	0.071	0.16	0.3202	-0.2222	0.1097	14.7866	0.3012	0.0735
たくさん	0.024	0.30	-0.0239	0.5372	-0.0822	0.0275	0.9752	0.0228
見られる	0.024	0.30	-0.0239	0.5372	-0.0822	0.0275	0.9752	0.0228
顔	0.039	0.31	0.3890	-0.3741	0.1481	12.1259	0.4468	0.0701
学年	0.071	0.37	-0.4996	0.0456	0.3467	36.0093	0.0056	0.3232

の通りとなった。小学校では「空き教室(0.00)」、「更衣室(0.00)」、「特別支援室(0.00)」が高かった。中学校では統計的に有意な場所はなかった。つまり、小学校では荷物を空き教室、更衣室、特別支援室に置いている可能性がある。

Q13は「支援する学級の決定の有無」とそれぞれについての考えを回答したものであった。その回答を派遣校種と回答(有・無)をカテゴリーとして分析した結果、Table 9の通りとなった。「小学校はい」の記述回答数は38であった。その中では「決まって(た)(0.46)」、「関わり(0.43)」、「たくさん(0.11)」、「見られる(0.11)」が高かった。回答例は「支援する学級が決まっていた方が子どもの様子も把握しやすい。また、子ども、先生との信頼関係を築く事が出来るし情報がやり取りしやすい。支援しやすく感じる」などがあった。「小学校いいえ」の記述回答数は2であった。その中では「学年(0.84)」、「学級(0.33)」が高かった。回答例は「様々な学年に入れて勉強になる」などであった。「中学校はい」の記述回答数は13であった。その中では「名前(0.75)」、「顔(0.71)」、「子ども(0.30)」が高かった。回答例は「自分の顔と名前を子どもが覚えてくれて、積極的にわからないところを聞いてくれるので支援しやすい」などであった。「中学校いいえ」

の記述回答数は2であった。その中では「学級(0.63)」が高かった。回答例は「色々な科目や様々な学級に参加できるののためになる」などであった。

Q14「支援を依頼された児童生徒についての情報や具体的支援方法の指導がない場合、具体的にどのような支援を行ったのか」について小学校で8、中学校で3の記述回答があった。それらを分析した結果、Table 10の通りになった。小学校で「支援(0.00)」、「授業(0.00)」が高かった。回答例として「自分で支援が必要だと思う児童に臨機応変に支援した」、「授業への参加呼びかけ。課題取組みの際の支援」などがあった。中学校では「子ども(0.03)」、「支援(0.00)」が高かった。回答例として「子どもを観察して、学習内容が理解できていない場合は隣の席まで行き、一緒に問題を解くように励ます」、「授業への参加呼びかけ、課題取組みの際の支援」などがあった。

Q15「派遣校の教師との打合せ時間がある場合、その時間と内容」について自由記述内容を時間、時間帯、打ち合わせ者、打ち合わせ内容に分けて分析した結果、Table 11の通りとなった。時間について「小学校」で12の記述回答があり、「5分間(0.00)」、「数分間(0.00)」が高かった。「中学校」では10の記述回答があり、「10分間(0.13)」が高かった。

Table 10. 具体的支援指導がない場合の支援活動

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.750	0.02	-0.1361	25.0000
中学校	0.250	0.17	0.4082	75.0000
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
支援	0.250	0.00	0.0000	0.0000
授業	0.250	0.00	0.0000	0.0000
子ども	0.375	0.04	0.1925	25.0000
注意	0.125	0.33	-0.5774	75.0000

Table 11. 打ち合わせ時間, 時間帯, 対象者, 内容

質的変数		構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	時間	0.524	0.02	-0.1328	47.6191
	時間帯	0.500	0.02	0.1260	50.0000
	対象者	0.658	0.03	-0.1626	34.2105
	内容	0.465	0.05	0.2234	53.4884
中学校	時間	0.476	0.02	0.1461	52.3809
	時間帯	0.500	0.02	-0.1260	50.0000
	対象者	0.342	0.10	0.3127	65.7895
	内容	0.535	0.04	-0.1943	46.5116
構成要素		構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
時間	10分間	0.238	0.06	0.2479	75.4463
	5分間	0.429	0.00	-0.0636	8.9286
	数分間	0.333	0.01	0.0953	15.6250
時間帯	帰校前	0.143	0.00	0.0000	0.0000
	授業前	0.357	0.00	0.0000	0.0000
	職員朝礼時	0.071	0.00	0.0000	0.0000
	出校時	0.321	0.01	-0.1111	25.0000
	空き時間	0.107	0.11	0.3333	75.0002
打合せ者	コーディネータ	0.447	0.02	0.1468	18.9642
	学級担任	0.421	0.04	-0.1941	31.2044
	教頭	0.105	0.11	0.3328	22.9257
内容	支援内容	0.140	0.00	0.0699	1.5724
	支援方法	0.233	0.00	0.0699	2.6206
	重点指導する子ども	0.047	0.00	0.0699	0.5241
	学習内容	0.233	0.02	-0.1306	9.1315
	活動内容	0.209	0.07	-0.2642	33.6008
	気になる事	0.070	0.16	0.4041	26.2453
	子どもの様子	0.070	0.16	0.4041	26.2453

時間帯について「小学校」で 15 の記述回答があり、「帰校前(0.00)」、「空き時間(0.00)」が高かった。「中学校」では 10 の記述回答があり、「帰校前(0.00)」、「空き時間(0.00)」、「授業前(0.00)」が高かった。打ち合わせ者について「小学校」で 16 の記述回答があり、「学級担任(0.67)」が高かった。「中学校」では 13 の記述回答があり、「コーディネータ(0.47)」、「教頭(0.19)」が高かった。打

ち合わせ内容について「小学校」で 15 の記述回答があり、「気になること(0.13)」、「子どもの様子(0.13)」が高かった。「中学校」では 15 の記述回答があり、「活動内容(0.51)」、「学習内容(0.10)」が高かった。

Q16 の「帰る時刻が決まっていないので困る」は小学校で 1 名の回答があったが、具体的な記述はなかった。

Q17 「連絡記録表を読んでいる人を知

っている場合、その人の職種」では、小学校 37, 中学校 15 の記述回答があった。それを分析した結果、Table 12 の通りと高かった。

Table 12. 連絡記録表確認者の職種

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.744	0.03	-0.1625	25.5814
中学校	0.256	0.22	0.4726	74.4186
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
校長	0.081	0.00	0.0685	0.4978
教頭	0.116	0.02	-0.1279	2.4778
コーディネータ	0.430	0.05	0.2190	26.8614
担任	0.302	0.10	-0.3219	40.7821
学年主任	0.023	0.31	0.5597	9.4853
授業担当教師	0.023	0.31	0.5597	9.4853
教務主任	0.023	0.31	-0.5863	10.4102

Q20 の「市教委の説明会の内容と派遣校での説明が違っていた」と回答した人は小学校で2名であった。記述回答は「特別支援学級ではなく普通（通常）学級もした」というものと「説明会で聞いた話より、落ち着いていた」というものであった。

Q21 の「市教委が説明会で派遣校で配布されるといわれたものがなかった」と回答したのは小学校で1名であった。その記述内容は「名札」であった。

Q22 の「学習支援ボランティア活動から得たものがある場合、その内容」について小学校 46, 中学校 17 の記述回答があった。それを分析した結果、Table 13 の通りとなった。「小学校」では「子ども (0.18)」, 「学級 (0.00)」が高かった。回答例としては「子どもとの信頼関係は大切で、学級だけでなく、個々に添った支援や言葉がけをしないといけないこと。子どもへの接し方や叱り方など、指導においても学ぶことが出来たと思う」など

があった。「中学校」では「学級 (0.00)」, 「学校現場 (0.00)」が高かった。回答例としては「通常学級に在籍する障害児の生徒に対する授業中の支援などを学校現場でどのようにしているのか等見ることができた」などがあった。

Q23 の「学習支援ボランティア活動時間が不適切」と回答した人は中学校で3名であった。記述内容は「出来るなら1日」, 「5時間」であった。

Q24 「所属大学での指導が必要な場合、望む内容」について小学校 28, 中学校 12 の記述回答があった。それを分析した結果、Table 14 の通りとなった。「小学校」では「子ども (0.19)」, 「できる (0.00)」, 「何 (0.00)」, 「支援方法 (0.00)」, 「自分 (0.00)」などが高かった。回答例としては「実際に大学で支援方法について指導してもらったので、担任の先生も分からないような専門家の指導をしてもらうと、次回、自分には何ができるかどのような介入ができるかが分かって支援しやすく

Table 13. 学習支援ボランティア活動から得た内容

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.713	0.00	-0.0346	28.6957
中学校	0.287	0.01	0.0880	71.3044
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
授業	0.061	0.00	-0.0027	0.0154
支援	0.087	0.00	0.0288	2.4300
子ども	0.513	0.00	-0.0349	20.9576
教師	0.139	0.01	0.0565	14.9107
学級	0.035	0.01	-0.0817	7.8030
必要	0.035	0.01	-0.0817	7.8030
学校現場	0.026	0.01	0.1025	9.2160
経験	0.026	0.01	0.1025	9.2160
支援方法	0.026	0.01	0.1025	9.2160
生活	0.026	0.01	0.1025	9.2160
理解	0.026	0.01	0.1025	9.2160

Table 14. 所属大学で希望する指導内容

質的変数	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
小学校	0.552	0.01	-0.1057	44.7761
中学校	0.448	0.02	0.1304	55.2239
構成要素	構成要素数構成比	距離	成分スコア	絶対寄与度
支援方法	0.104	0.00	-0.0386	0.1289
大学	0.104	0.00	-0.0386	0.1289
できる	0.060	0.01	0.1051	4.7804
ない	0.030	0.01	0.1051	2.3902
何	0.060	0.01	0.1051	4.7804
事例	0.030	0.01	0.1051	2.3902
自分	0.060	0.01	0.1051	4.7804
状態	0.030	0.01	0.1051	2.3902
人	0.030	0.01	0.1051	2.3902
知識	0.030	0.01	0.1051	2.3902
適切	0.030	0.01	0.1051	2.3902
発達段階	0.030	0.01	0.1051	2.3902
必要	0.060	0.01	0.1051	4.7804
方法	0.030	0.01	0.1051	2.3902
話	0.030	0.01	0.1051	2.3902
子ども	0.194	0.02	-0.1270	22.7015
実際	0.045	0.05	-0.2301	17.2031
先生	0.045	0.05	-0.2301	17.2031

なる。また、子どもたちについて理解しやすい」などがあった。「中学校」では「できる(0.00)」、「ない(0.00)」、「何(0.00)」、「支援方法(0.00)」が高かった。回答例としては「学習障害のある生徒の話や支援方法を講義で聞くことはよくあるが、実際にその子どもたちと関わる機会がなかったので関わる機会（実習や観察等で）があればいいと思う。具体的に学校での過ごし方や教科支援のポイントをもっと教えてほしい」、「何もないよりはあったほうがいい」、「教科担当の先生と一緒に入っているだけなので、他に何ができるかアドバイスを適宜受けられるような環境があればと思う。概論的な漠然としたものよりも、より臨床的な活動法を一緒に考えてくれる人がいたらと思う」などがあった。

考 察

本研究は、学習支援ボランティアをしている学生を対象とし、実際に派遣された学校や学級においてどのような環境でどのような支援を行っているのか、また、活動していく中で学生が必要としているものは何かを質問紙調査を用いて検討し、今後の特別支援教育及び学習支援ボランティア活動の参考資料にすることを目的とした。

調査の結果を活動条件、ボランティア学生の派遣校での支援への指導についての意識に分けて考察を行い、今後の課題について検討した。

(1) 活動条件

市教委の説明は理解でき、市教委と派遣校間の説明のずれはなかった。派遣校との打ち合わせ日時は派遣校からの1回目の連絡で決まっていた。活動報告書の保管場所、利用できる机、荷物の置き場所などはテキストマイニング分析結果か

ら派遣校で場所の違いはあるものの決まっていた。帰校時刻は一定で、決まっていた。

小学校と中学校で差があった学校行事への参加依頼は、小学校の方が中学校よりも多かった。学校行事の実施に小学校の方が人手が必要なのもかもしれない。

各ボランティア学生が派遣される学校の所在地、電話番号、地理情報などの連絡がなく、自分で調べた学生が多かった。今後、事前情報に学校名だけでなく、所在地、電話番号、地図などを説明会時に伝えることが求められる。

(2) ボランティア学生の派遣校での支援への指導についての意識

支援する学年や学級が決まっている比率が高かった。選択項目別に書かれた自由記述内容をテキストマイニング分析した結果からボランティア学生はどちらの場合であってもそれを肯定的に受けとめていると言える。

派遣校との打ち合わせ時間については派遣校種間で差があった。テキストマイニング分析結果からは打ち合わせ時間にもそれぞれ特徴があり、小学校では数分間、5分間であるのに比べ、中学校では10分間であった。小学校では打ち合わせ時間は中学校に比べてない割合が高く、打ち合わせ時間があっても中学校のそれよりも短いことが明らかとなった(野津・石田 2009)。これは派遣校種の特徴に関係しているかもしれない。つまり、小学校では担任教師がほぼ1日中教室で児童の指導に掛かりっきりになっていることが多いからであろう。戸ヶ崎・酒井・溝邊(2008)は、ボランティア学生を対象にした調査で打ち合わせの有無と次年度への活動継続意欲に関連がみられたと報告している。したがって、ボランティア学生とどのように打ち合わせの時間を確保す

ることができるかを派遣校、市教委、指導大学で検討することが求められる。

連絡記録表は派遣校先のどのような職種の人が読んでいるのかを知っており、返信があり、そこに書いた内容が支援に活かされている比率が統計的には高かった。しかし、そうではないと回答しているボランティア学生もいた。渡部・金山・武藤(2008)は、多忙な教師との連絡に教師があまり時間をかけずに連絡を取り合えるように記号を利用したコミュニケーションカードを使用し、担当教師との連絡が向上したと報告している。連絡記録表の在り方についても今後、様式や活用法等を検討する必要があると言える。

所属大学での支援方法の指導は必要であるか不要であるかについては統計的に有意差はなかった。松尾・杉村(2009)は、学習支援ボランティア学生を対象に事後の振り返りレポート作成とレポート内容フィードバックを加えたカンファレンスを行った方が学習支援ボランティア活動への理解に深まりがあったと報告している。所属大学あるいは大学間で連携したボランティア学生へのカンファレンスを行うことが今後の課題となる。

今後の課題として、テキストマイニング分析によって得られた探索的データ解析の内容をさらに検討し、派遣校の児童生徒、そしてボランティア学生にとっても学習支援ボランティア活動が有効になるために派遣校とボランティア学生所属大学とがどのように指導していけば良いのかをさらに検討することが求められる。

引用・参考文献

神戸市小学校長会 2004 続 変容する子どもたち みるめ書房

松尾 剛, 杉村智子 2009 学習支援ボランティアにおける学生の学びを促すカンファレンス構造の検討～事後の振り返りとフィードバックに注目して～ 教育実践研究 18 119-126

日本電子計算株式会社 2000-2003 WordMiner

野津吉宏, 石田耕一 2009 「大学性による学習支援ボランティア(アシスタントティーチャー)事業」の成果と課題 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 8 61-69

戸ヶ崎泰子, 酒井祐市, 溝邊由美子 2008 小中学校の特別支援教育における学生支援員活用の試み 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 19 135-146

徳島市教育研究所 2010.6.16 学習支援ボランティアバンク
http://www.city.tokushima.tokushima.jp/kyoiku_kenkyu_sho/gaiyo10.html
(2010.9.17)

山崎晃資 2005 なぜいま特別支援教育なのか これからの特別支援教育のために 軽度発達障害の子への援助の実際 児童心理 59(9) 2-12

渡部太郎, 金山好美, 無藤崇 2008 通常学級の担任教師と教員補助者のコミュニケーション・カードの改善による担任教師からのコメントの増大 行動分析学研究 22 39-48

(受付日2010年9月30日)

(受理日2010年10月12日)